

立春

東風解凍

はるかぜ
こおりをとく



*季節の風物詩

梅 うめ（花）



2月 04日—08日

【立春 初候】

東風吹かば
にほひおこせよ

梅の花
主なしとて
春を忘るな

— 菅原道真

東から吹いてくる風が、厚い氷を解かしていく
時期という意味です。

「凍」は、厚い氷をあらわしています。
また、暦によつては「東風」を「とうふう」と読
ませてゐるものもあります。

昔は、東から春がやつてくると信じられていま
した。ですから東風は春風のこと。「こち」とも
呼ばれ、この風が吹くと寒さがゆるみます。朝
東風、夕東風、雨東風、梅東風、桜東風、雲雀東
風、鰐東風……。地方によつて、さまざまな言葉
を冠して親しまれた風です。

「春告草」という異名を持つ梅
の花。東風を待つて咲くので
「風待草」とも呼ばれます。
菅原道真が左遷されたときに別
れを惜しんだ梅が、道真のあと
を追つて、一晩で大宰府まで飛
んで行つた「飛び梅伝説」は有
名ですね。

「梅曆」というように、春を知
る日安ともなつてきました。

菅原道真が左遷されたときに別
れを惜しんだ梅が、道真のあと
を追つて、一晩で大宰府まで飛
んで行つた「飛び梅伝説」は有
名ですね。

「うすごおり」と読んでも意味
は同じですが、「はくひょう」
と読むと単に薄い氷というだけ
の意味になります。

「春一番」とは、立春から春分までの間に吹く強
い南風のこと。この風が吹いた後は、ぐんと気温が上がりま
す。気象庁の発表はありませんが、その後も、春一番、春二番
……と続きます。次々とあたたかさを連れてやってくる、少々
手荒い春の使者です。

2月 09日—13日

【立春 次候】

*季節の風物詩

目白 めじろ（鳥）

表記は「黄鶯」となつてますが、これは高麗
鶯のことです。中国や朝鮮半島で見られる鳥で、
日本ではめつたに見られません。もちろん、おな
じみの鶯に置き換えられてきました。「観院」は、
鳴き声の美しい様子をあらわす漢語です。
一年中日本にいる鶯ですが、冬の間は、藪の中
で「チャツチヤツ」と鳴くだけ。これを「笛鳴き」
といいます。そして「春告鳥」の異名どおり、春
になるとさえずり始めるのです。その「初音」は、
昔から心待ちにされてきました。

鶯の谷より
出づることなくは
春くることを
たれか知らまし
— 大江千里



鮮やかな黄緑色の目白を見て、
鶯と間違える人は少なくないよ
うです。実際の鶯は、薄茶色に
近い地味な鳥。しかもめつたに
姿を見せません。そこで、よく
日立つ目白と間違えられてしま
うのです。

その名のとおり、目の周りが白
い鳥で、「チイーチイー」と甘い
声で鳴きます。求愛のさえず
りは「長兵衛、忠兵衛、長忠
兵衛」と聞きなされました。

鶯菜 うぐいすな（野菜）

小松菜の旬は冬ですが、春に十
センチほど伸びたものをつまみ
菜します。ちょうど鶯が鳴く
ころ。色のイメージも似ている
ことから「鶯菜」と呼ばれるよ
うになりました。やわらかな早
春の味です。

鰯 いわしだ（魚）

「春告魚」と呼ばれた鰯。かつ
ては春になると、産卵のため、
北海道に大群が押し寄せていました
そうです。ところが、昭和の中
ごろから激減してしまいました。
鰯の卵が「数の子」。これは「カ
ド（鰯の異名）の子」が変化し
たものです。

黄鶯観院

うぐいすなく



魚上氷

うおこおりを
いづる

* FEB.14-17



2月 14日—17日
【立春 末候】

魚は
氷に上
り光の
渦まとふ

— 北光星

「公魚」は、凍った湖に穴を開けて釣る「穴釣り」が有名ですね。本来は、鮎のように淡水で生まれ、海で育つ、また川をさかのぼるという習性の魚だそうです。近年、湖などに移植されるようになって、陸に封じ込められた公魚の方がよく知られるようになりました。

「公魚」という漢字を当てるようになったのは江戸時代、将軍

に献上されるようになってから。「公儀(幕府)」あるいは「公儀(幕府)」の魚という意味だったのです。

渓流の雪も解け、川魚たちも元気に泳ぎ出します。「雪代」は雪解け水のこと。このころの山女は「雪代山女」と呼ばれます。ほかにも「雪代岩魚」「雪代鱈」……。きらきらひかる魚たちが、まるで雪の化身のよう

に見えます。

まだ冷たい風の中で、凜と咲く椿は印象的です。今では様々な色や形の園芸品種ができました

が、やはりおなじみのは、真

つ赤な「藪椿」ではないでしょ

うか。

花のつけ根からぼとりと落ちる

様子は「落椿」と呼ばれます。

そんな散り際の潔さを好む人も

多いようです。

割れて表面に浮いている氷を「浮氷」といいます。スケールの大きなところでは、北海道のオホツク沿岸に、「流水」が寄せてくる時期でもあります。

水温む季節。割れた氷の間から、魚が飛び跳ねる時期ということです。

冬の間、魚たちは水の底でじつとしています。そして、水温が上がってくると、浅いところに移動するのです。それを「巣離れ」と呼びます。地上よりも早く、水の中には春がやってくるのでしょ。

雨水

土脉潤起

つちのしう
うるおいおこる

* FEB.18-22



2月 18日—22日

【雨水 初候】

児の手を引いて
ゆるゆると
春の泥

— 杉田久女



雨が降って、土がいくらか湿り気を含み出すという意味です。

「脉」は「脈」の俗字。「土脈」と書いても大地とか地脈のことになります。大地が息つき始めているのですね。

この時期は気温が低いため、雨が降つたあとも乾きにくく、さらに雪解けや霜解けも加わって、土がぬかるみます。これを「春泥」といいます。今ではほとんどが舗装された道になつて、なかなか実感がわからなくなつてしまいまして、は身近な春の風物詩でした。

※季節の風物詩
雪割草 ゆきわりそそう — 花 —
「雪割草」はサクラソウ科の高山植物。桜草に似たピンクの花です。ほかに、キンポウゲ科の「洲浜草」や「三角草」も「雪割草」と呼ばれます。古くから園芸家に愛好されてきたので、こちらを思い浮かべる人の方が多いかもしれません。

どれも雪を分けて咲く可憐な花たちです。

春菊 しゅんぎく — 野菜 —
関西では「菊菜」とも呼ばれる「春菊」。食用にしている国は珍しく、他の国では観賞用だそうです。たしかに、春咲く黄色や白の花は、見ないで摘んでしまうには惜しい愛らしさです。ちなみにマーガレットの和名は「木春菊」。春菊に似ているところから名づけられました。

河原鶴 かわらひわ — 鳥 —
雀が群れていると思つても「河原鶴」かもしれません。緑がかつた茶色の地味な鳥ですが、飛ぶと羽の黄色が目立ちます。早春、よく群れているからか、春の季語。とはいって、一年中いる鳥です。求愛するときは「ジーイン」となります。

